城 南 中 だ よ り

学校教育目標
希望と愛をはぐくむ
美と活力の学校

２ 月 号　　令 和 ８ 年 ２ 月 ２ 日 発 行　　第 １２ 号

〒339-0034　さいたま市岩槻区笹久保５７７　http://jounan-j.saitama-city.ed.jp/
℡ ０４８－７９８－０００７　　さわやか相談室直通 ０４８－７９７－０５１４

自然の教室から戻りました。生徒たちの成長を感じる３日間でした。

新しい学校教育の一例として

校長　　吉　原　誠　士

昨今、様々な分野で将来の先行きを見通すことが困難だと言われています。それを受けて教育活動にも大きな様変わりが求められたのは約９年前でした。社会の移り変わりは企業の規模を示すデータとされる「時価総額」にも示されていました。世界ランキングのトップ１０を見ると、１９８９年には日本の会社が７つも並んでいたのに、２０２４年になると１社も含まれていません。国の将来を案ずる声はこのようなところからもあがり、日本教育のあり方が問われるようになりました。特に求められているのは新たな価値を創造する（様々な側面から考えを深めて自らの最適解や新たな解を見出す）力、粘り強く挑戦、探究をする（エラーにめげずトライを続ける）力です。

城南中学校生徒の現状は「全国学力・学習状況調査」の分析から「理由の説明や分析結果のまとめを求める記述式の問いに躊躇（ちゅうちょ）する者が多い」のがわかります。同様に「学習面への取り組みは真面目だが知識量を積み増しして読解力と基礎学力の補強が求められる」ことも示されました。変化のスピードはここ１～２年も加速して、未来予測は益々難しくなりましたが、それを横目に本校の教職員は「時代が変わってもそれに対応しきれる人」を育てる教育を展開してきました。行事や年間計画の見直し、授業や評価のあり方の研究、様々な事情を考慮したオンラインによる学習参加の保障などもその一環です。

授業では社会的背景と子どもたちの実態を考慮して、これまで日本で半ば伝統のように行われてきた「チョークとトーク」で展開する授業方式を変えようとしています。これは一人ひとりが「知識を増やす」「基礎学力をつける」にあたって、受け身一辺倒（いっぺんとう）ではなく、「学習方法を身に付けて、自分で進められる（自走できる）ようにする」試みです。古人の「人ニ授（さず）クルニ魚ヲ以（もっ）テスルハ　人（ひと）ニ授（さず）クルニ　漁（すなどり）　ヲ以（もっ）テスルニ如（し）カズ」※という言葉を教育に取り入れるものでもあります。さらには、「習得」した知識を「活用」した「思考（考える）」「判断（決める）」「表現（発表する）」の機会が多い授業へとつながります。

もちろん、学力だけで人を評価することはできません。先週実施した自然の教室では現地で迎えてくださった多くの方々から本校生徒のよさである「気遣い」や「優しさ」を指摘されました。どのような世の中になろうとも、支えとなるのは人との関わりです。学校は関わり合いを学ぶ格好の舞台です。２月には、城南中を会場に市内教職員を対象とした研修会が開かれます。ここでは１年生のクラスが授業を公開し、「話合い」を中心にした学級活動が提案されます。意見交換は「予定調和と同調圧力の排除」「少数意見の尊重」がカギになります。そして個と集団の関係について子どもたちが得る知見は、今後の教科の学習活動にも役立つでしょう。期待が高まりますね。

※　元文は「援人以魚　不如援人以漁」（出典はいろいろ言われるが実際は不明）。意訳すると「飢えた人を助けるにあたっては、魚を与えるよりも、魚の獲り方（漁）を教える方がよい」